28P1-pm220

日本の伝統医療におけるアズキの抗ウイルス活性についての検討

○河合 明彦¹, 藤田 きみゑ²(¹生産開発研(京都), ²滋賀県大人看)

【目的】インドや中国の伝統医学を取り入れた代替医療あるいは統合医療の評価が高まってきた今、日本の伝統医学も色々な角度から見直されている。一例として、我々は日本に狂犬病の流行があった時代になされた生アズキを使った狂犬病治療の記載に着目し、実用的な使用の可能性について検討した。

【方法】伝統医療におけるアズキの有効成分について、赤小豆と白小豆を用いて培養細胞レベルでの狂犬病ウイルスの複製に及ぼす影響を比較検討した。

【結果】乾燥赤アズキの粉末から生理的食塩水で抽出したのものには弱い抗ウイルス活性が検出され、加熱処理では活性の喪失あるいは複製促進効果が見られた。この抽出液を4℃で2,3週間保存すると抗ウイルス活性の増強がみられ耐熱性を示したことから、抽出当初のものとは別のものが生じていたと推測される。一方、アズキを水戻しすると、水が赤く着色するとともに強い抗ウイルス活性(耐熱性)も検出されるようになり、実の方には易熱性の弱い活性が検出された。参考に、白アズキを水で戻して得た液は無色で抗ウイルス活性はなく、むしろ複製を促進する効果が見られ、また、実の方の抽出液には易熱性の抗ウイルス活性が検出された。

【考察】アズキには狂犬病ウイルスの複製に影響を及ぼす少なくとも3種類の活性、即ち、易熱性および耐熱性の抗ウイルス活性因子、並びに耐熱性の複製促進因子が検出される。乾燥小豆から抽出当初に抗ウイルス活性が弱いのは、この複製促進因子により相殺される分もあるためと思われる。強い活性を示す耐熱性因子の実体については今後の検討課題である。